

夏季研修 part 1

3 回に分けて、夏季研修の一部を紹介します。

○研究員の研究発表会 7月29日(火) 人権センター

4 小学校合わせて6名の参加でした。前半は「令和6年度の研究報告会」を行いました。研究の動機や概要、成果と課題などを報告しました。受講者からは「実践に基づいた報告で分かりやすかった。」「探究課題に至る取り組みがよく研究されていたと感じました。」といった感想を頂きました。また、報告会の改善点として「実際の授業をビデオにして見せてほしい。子どもの様子、発言も見た方がより報告が分かりやすい。」というご意見を頂いたので来年度の報告会の参考にさせていただきます。

後半は「思考ツール活用講座」を行いました。初めに「思考ツール」に関する講義を行いました。その後、グループで思考ツールの演習に取り組みました。総合の探究課題を受講者同士が話し合いながら分類したり、抽象化したりすることで思考ツールの使い方と探究課題の見つけ方を体験してもらいました。受講者からは「演習が野洲市の魅力再確認になって学びになりました。」「生活・総合以外でも使える考え方であることが分かりました。様々な教科で探究的に学ぶ際に活かしたいと思います。」といった感想をいただき、思考ツールの活用や総合の探究課題の見出し方の参考になったのではないかなと感じています。ご参加いただいた先生ありがとうございました。



(研究員報告会の様子)



(思考ツール活用講座の様子)

○書写実技講習会 7月30日(水) 三上小学校

小・中学校合わせて14名の参加でした。講師は今井みつ子先生でした。実技を中心に「子どもの気持ちになって書く」をテーマに様々な字を書きました。最初に今井先生から筆の根本までしっかりと染み渡るように墨量を大切にすることや体全体で筆先を立てながら書くことなどを教わりました。「道」という字に始まり、2文字や4文字、象形文字など様々な字を「子どもなら・・・」という視点で文字を書いていきました。また、筆以外の道具(段ボールやトイレットペーパーの芯など)を使って書くことにも取り組みました。受講者からは「筆では殻を破ることができなかったが、違う道具を使うと自分では予想しない線が生まれ、大胆な作品に仕上げることができた。」や「大人の作品ではなく、子どもの気持ちになって書くことがなかなか難しい。」など書くことの奥深さを実感されていました。

本質的な内容から具体的な指導方法、用具の紹介まで幅広く教えてくださり、2学期からの授業にすぐに生かせる内容となりました。



(講師の今井みつ子先生)



(受講者同士講評している様子)

最適な使い方 タブレットによるデジタル教育

スウェーデン・フィンランドでは、教材をデジタル化したことにより、子どもの学力が低下したといわれています。（スウェーデンは、紙の教科書の質の問題もあり、デジタル化という流れが生まれたのですが）学力が何を意味するかは捉える側で異なりますが、ある観点での能力が下がったことは事実のようです。それに伴い、紙の教科書を使い鉛筆での手書きを重視する教育へ戻したと聞きます。これも日本より早くからICT活用に力を注いできたからこそ、分かってできる大胆な判断です。

日本と言えば、文科省が小・中学生に一人一台の端末を整備する「GIGAスクール構想」を打ち出したのは2019（令和元）年12月でした。コロナの蔓延によりオンライン授業が求められたこともあり端末の整備は急速に進み1年余りで整備はほぼ完了しました。今でも、通信速度の問題やフリーズするなどハード面での課題が残されている現状ですが、ソフト面では、予定の前倒しもあったため人材育成を含め、その進捗はハード面に比べ遅れてしまい現場の焦燥感と多忙感を増やしてしまいました。

多額の費用が投入されたこともあり、文科省や教育委員会は各学校に使用促進を働き掛け、学校は使用頻度を上げる努力を重ねてきました。

それと共にまた別の課題も見えてきました。それは、子どもの集中力や理解力、創造力、思考力、表現力などの学力面を懸念する指摘です。また、健康面で、視力や姿勢を心配する声も当初から出ていました。友だちとの関わりが希薄になり、子どもの学びが孤立化、孤独化することを心配する声もあります。

また、現場の教師からは、タブレットの使用が多くなると文字を書く時のハネやハライなどが正しくできない、漢字の筆順が身につけにくいなど、小学校低学年での弊害を指摘する声もあがっています。

利便性のある合理的な情報機器タブレットを使わない手はありません。大切なのは、使う場と使い方を吟味しなければ教育効果は期待できないということです。むしろ学習の本筋からそれてしまったり、時間を取られてしまったり、悪い影響が心配になります。タブレットも教具の一つです。万能ではありません。学びの中での選択肢の一つです。選択した際は、その強みを十分活用できるよう教師における本時の構成力や授業力が必要です。デジタル教育を推進するとき、アナログな指導のよさを継承しつつデジタルな教材・教具の特性を生かした「最適な使い方」が求められます。それが「個別最適な学び」へとつながっていきます。学びのねらいに即さず、とりあえずタブレットを使っていれば時代に合った教育になっているという考え方ならば、それは子どもの学び力を伸ばすことにはなっていません。教師の授業力を上げることになりません。本質を見間違わないようにしましょう。

重視すべき点は、成長の初期にある子どもほど、紙面で文字・活用に直接触れ、実物・本物に接することだと言えるでしょう。直接体験を通して体で学ぶことを基本に据えたいものです。

もちろん、デジタル教育が全教員で行われていくということはいくつまでもありません。

ICTを効果的に活用した授業計画を企画する

資質・能力を高めるために適しているから活用する

- ・資料提示
- ・情報収集
- ・情報整理
- ・表現活動

いつ、どのように活用するのか
（単元構成での位置付けを明確に）

- ・課題設定・発見の資料として
- ・話し合い活動での意見交流として
- ・発表やプレゼンテーションとして
- ・振り返り活動として etc.

ICTを活用することが目的にならないようにする



ソフトの操作に不慣れだとそれだけに意識や時間が費やされてしまい、本時の学習内容に面と向かって関わるできないことも。

33

答えは、最下段に載せています。

距離は、野洲市小篠原から栗東 IC に直結する 0.0 km で、片側 2 車線、設計速度は 80 km/h です。当初は今年秋の全線開通の予定でしたが、アスベストの処理等に時間がかかり、栗東内で一部開通するのが来年度と訂正発表されています。完成すると栗東第 2 IC から野洲市役所までの所要時間は、現道の約 20 分から約 7 分まで縮まるそうです。

《国土交通省資料より 完成イメージ》

- ①4.7km ②5.7km ③6.7km ④7.7km

いわむら かすお

14ひきのおつきみ

いわむら かずお 作・絵
出版社 童心社

その光景を木の上から描写した構成は立体的で、まるで迷路を見ているかのようです。「自分たちも上ってみたい」と、うらやむ小さな読者も、きっといることでしょう。

自然の気高さと、自然と共存する美しさが描かれた、日本の秋がいっぱいの作品です。

文： ジョナサン・エメット
絵： ヴァネッサ・キャバン
訳： おびか ゆうこ
出版社： 徳間書店

やんちゃんもぐらと仲間たちの表情が愛らしい、おつきさまがきれいな季節に読みたい絵本です。やんちゃんもぐらと仲間たちの表情が愛らしい、お月様がきれいな季節に読みたい絵本です。

